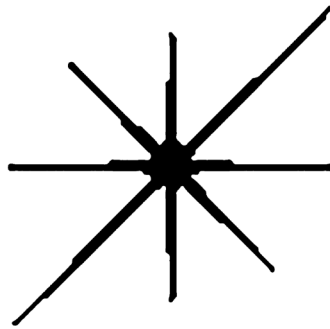


コミット通信 34

[23年5月号特別付録(1)]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

ニューヨークのランボー

—旅のみやげ5

野村喜和夫

いまから四半世紀ほど前の1998年、あのワールドトレードセンターのツインビルがまだそびえていた頃のニューヨークでの話である。私は当時パリに住んでいて、そこから、まだ訪れたことのないニューヨークにも足を伸ばしてみようということになった。パリ発なら、日本から行くよりも半分以上の飛行時間で済むのだ。

冬の2月のたった一週間という短い滞在であったが、同じ欧米の都市でも、パリとニューヨークではこうも違うのかという印象に打たれた。マンハッタンの、碁盤の目状に張りめぐらされた街区は、まるで高密度な集積回路か何かのようで、そこをびりびりと空気をふるわせて世界の最先端の情報が電気さながら駆けめぐっている。それに比べるとパリは、とくにニューヨークから戻ったときそう感じたのだが、なんと牧歌的で、時間も緩やかに流れ、数世紀来の石の夢に都市全体がまどろんでいるかのようにさえ思われた。

そんなニューヨークでも、また全くべつの面があることを私は発見した。なにしろはじめてのニューヨークなので、いつも地図とにらめっこしながら、あるいはいつも地図を頭に描いて移動していた。そうするとわが脳梁を不思議とエロティックな想念の糸屑が揺曳してよぎる、その感じに変だなと思っていたら、あるときふと気づいたのだ。ニューヨークの地図は女体の構造に似ている。まさか、と思われる向きもあるかもしれない。というのも、マンハッタン、あのニューヨーク湾に突き出したペニスラ状のかたちは、むしろ男根そのものではないか。それはたしかにそうなのだが、もう少し引いて、俯瞰的に、隣接のブルックリンやジャージーシティまで視野に入れてみると、女体を股間のところで縦ふたつ割りにしたその断面図にそっくりの図柄が得られるのである。

いま、人体アトラスを机上に広げて確認すると、肛門から始まる褶曲豊かな直腸粘膜断面がみえ、それから多数の骨格筋から成る隔壁を経て、押し潰れたような膣粘膜断面がみえる。さてつぎに、それにニューヨークの地図を重ねると、そう、ぴったり、直腸がイーストリバー、隔壁がマンハッタン、そして膣がハドソン川、膣前庭がニューヨーク湾、ではないか。一見男根のようにみえたマンハッタンは、実は女性の性と排泄を隔てる微妙なゾーンだった？！

その隔壁のなかを、私は、えーっといまは57丁目のここだから、あと2ブロック東に歩けば5番街にぶつかる、などと移動していたことになる。あるいは、このブロードウェイをずうっと南下してプリンス・ストリートとぶつかる角がグッゲンハイム・ソーホーだ、とか。そのたびに、性のほうに寄ったり、排泄のほうに振れたりしながら。

忘れずに書き記しておきたいのは、そのグッゲンハイム・ソーホーの隣のニューミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アートというところで、ランボーと出会ったことだ。

アルチュール・ランボー。不世出の天才少年詩人。1854年フランス北東部の地方都市シャルルヴィルに生まれ、15歳から20歳まで、世界文学に燦然と輝くような詩を書いたあと、突然筆を折り、詩人から商人へ、名高いアフリカでの沈黙の期間を経て、1891年にマルセイユの病院で全身ガンのため死亡——ということになっていたが、生きていたのだ。最初は、ニューヨークの地図や人体アトラスと同じように、二次元パネルに縮約されたかたちではあったけれど。

実を言えばランボーは、仏文科の大学院に在籍していた頃の私の研究テーマだった。修士論文は「ランボー『イリュミナシオン』における詩的エクリチュール」。その後、生来学者には向いていないことがつくづくわかって、詩人への道を選んだのだったが、今に至るまでランボーへの関心は保ちつづけている。

パネルに戻って、当然だが、ランボーは全然老けてはいなかった。1872年当時の、写真家カルジャによるとされる肖像写真が残っているが、あれそっくりの無表情な17歳の少年の顔をして、現代のタイムズスクエアあたりの雑踏に紛れ込んでいる。つまりコラージュである。首から下はTシャツにジーンズという現代風の服装だが、顔との違和感はほとんどない。だから、その二次元ランボーに向かって、私は思わず訊きそうになった。いま何をしているのか、たとえばかの名高い沈黙をふまえて、いまでも詩を書くというようなことはあるのか、というようなことを。

かと思うと、別のパネルでは、腕に麻薬の注射針を刺したまま、同じ顔を少し傾げて、それがいくぶんか恍惚とした表情に変化しているように見える。それはそうだろう、伝記でもハシッシュ吸引の目撃証言が知られているのだから。また別のパネルでは、ベッドに横たわり、ジーンズを膝までおろして、さすがは白人の、大ぶりのペニスの根元を握ってマスターベーションに耽っている。

「おいおい」と少しシラけた気分になった私は、何となくもう帰ろうと思い、そうだその前に作者の名前は？とパネルの下に眼を落とした。デイヴィッド・***ヴィッチというスラブ系の名前で、しかしその***の部分のアルファベットがよく読めない。そのままはじかれるように、出口を探して展示スペースを奥まですすみ、ところがなかなか出口が見つからないので、仕方なく、突き当たりを右に折れた。すると急に薄暗い通路となり、やや不安な面持ちでそこを少し歩くと、出口ではなく、別の展示スペースがあらわれた。今度はクラシックな感じの部屋で、入り口のパネルに、「ランボー遺品展」とあった。眼を展示スペースの中央のほうに向けて、「おお」と私は思わず驚きの声を上げた。ランボー愛用の皮革の旅行鞆が展示されていたのである。私はそれがかつて、ランボーの生まれ故郷の町シャルルヴィルのランボー記念館で見たことがある。使い古されてささくれ立ったような、異様に細長い茶系のトランクで、ただ、留め金のところはきらきらしていて、そのあたりから、アフリカでの詩人の沈黙それ自体が匂ってくるかのような匂いがあった。そのトランクが、まさにいま、私の眼前にある。しかしなぜここに？ 私は夢でも見ているのか。引き寄せられるように私はそれに近づき、そのまわりをぐるりとまわった。一度では飽き足りず、二度も、三度も。

とそのときだった、「友人のデイヴィッドが企画してくれたんです」と、背後からフランス語が聞こえてきた。私にも聞き取れる、ゆっくりと明瞭に音節を区切った話し方で。

「えっ」と思わず振り返ると、車椅子に乗った初老の、あるいはそれ以上に老けた白人男性がそこにいた。右足はどうやら太腿から下が義足になっているようだった。

一瞬ののち、私は眼を剥いた。ランボーだ、まぎれもないランボーだと私はなぜか直感した。二次元パネルどころの話ではない。魂と身体を備えた生身のランボーが、私の眼前にあらわれていたのである。確かに老けてはいる。髪は白髪になり、前頭部は禿げ上がり、目尻には小皺が寄っている。口髭も生やしている。しかし、アフリカで他人に撮らせた30代の全身写真より、むしろ少年の頃の面影をとどめているようにさえ思われた。とりわけあの眼、あの酷薄そうな青い眼……

沈黙の数秒が流れたあと、私は思いきってフランス語で訊ねてみた。

「ランボーさん、ですね」

「そうです」

伝記的事実を確認しておく、ランボーはアフリカで交易に従事していた1891年、足のガンに冒

されて歩けなくなり、やむなく本国フランスに戻って、同年5月、マルセイユのコンセプチュアル病院というところで片足切断の手術を受ける。その後いったん生まれ故郷の母親のもとに帰るが、病状は回復せず、数カ月後、ふたたび同病院に入院し、妹イザベルに看取られつつ、同年11月10日に息を引き取ったのだった。享年37歳。

ということは、いまここにいる片足のランボーは、足の切断手術を受けた1891年5月以降に、伝記的事実とは異なって生き延び、何らかのルートを辿ってニューヨークに来たことになる。それだけではない。今は1998年なのだから、そこからさらに時間旅行をしてきたことになる。そんな馬鹿な。

「さっきから」とランボーは私の思念を遮断した。「展示物を随分熱心に見ておられたので、私に興味があるのかと、そして、もしかしたらフランス語も解されるのではないかと」

「ええまあ、基本的な語彙で、ゆっくりと話していただければ」

「わかりました。そのように努めましょう。ところで英語は？」

「いえ、英語よりフランス語のほうが助かります」

「わかりました」

ランボーは少し間を置き、それから意味ありげな笑みを浮かべながら、

「びっくりされたでしょう」と言った。

「もちろんです。だっていまは1998年ですよ」

「まさか」とランボーはこともなげに否定した。「1918年です」

その断定の仕方があまりにも確信に満ちていた。ということは、いつの間にか私のほうで、1998年から1918年へとタイムスリップしてしまったのだろうか。思い当たるふしがあるとすれば、さっきの、第一展示室から第二展示室への通路だ。確かに少し変な感じはしたが、そこが異様な時空のぬじれの場になっていて、そこを私は潜った？ まあそういうことにしておこう。肝心なのは、いまが1918年だとしても、1891年にランボーが死んでからすでに四半世紀以上も経っているということだ。亡霊でもないかぎり、そんな彼が私の眼前にいるはずがない。

それに、さっきランボーは「友人のデイヴィッド」と言ったはずである。あのパネル作品の作者と同じファーストネームだ。ますます私は混乱した。

「伝記によればあなたは」と私はたどたどしいフランス語で訊き始めた。「1891年にマルセイユで死んでいる、それなのにここにいるとは、失礼ながら、誰かがランボーになりすましているとした考えられません。違いますか」

「それが、全く逆なのです」とランボーは、あらかじめ私の質問を想定していたかのように、人を煙に巻くときの悪戯っぽい顔つきで応じた。「マルセイユで死んだ私こそ、フェイクだったのです」

「えっ」と私はふたたび眼を剝いた。するとランボーは、車椅子を操作して私の脇に寄り添い、小声で囁くように、

「場所を移しましょう」と言った、「ミュージアムでは立ち話もなんですから」

こうして私は、車椅子のランボーに導かれるままに、ミュージアムを出て、しばらくビル内の廊下のようなところをすすんだ。道々、私は考えた。もしもこの初老の男がほんとうにランボーなら、千載一遇のチャンスではないか。ランボーをめぐる最大の謎は、その沈黙——つまり彼は、詩作にあれほどの天才ぶりを発揮したのに、なぜ詩を放棄してしまったのかということだが、その疑問を直接本人にぶつけてみるができるかもしれないのだ。

ランボーは何度か角を曲がったさきの突き当たりのドアを開けて、私を中に招き入れた。てらてらと電球の明かりが射すだけの、何もない、がらんとした部屋だった。窓が一つあって、そこから外の

景色を覗くと、たしかに1998年というよりは1918年のニューヨークの街景が確認できた。摩天楼はまだほとんどなく、くすんだ暗灰色の、あるいは赤錆びたようなレンガの倉庫が立ち並んでいる。椅子を差し出されたので、私は座った。ランボーは車椅子のまま、事務机を隔てて私と向き合った。

「日本人ですか」

「そうです。かつてはあなたの詩を研究していたこともあります。極東の日本まで、天才少年詩人としてのあなたの名声は絶大です。もっとも、いまが1918年なら、もう少し後になってからですけどね、小林秀雄という批評家が現れて」

「それは光栄なことですよ」とランボーは、極東での自分の受容にはさに関心なさそうに私の話をさえぎり、「あなたが未来から来たのなら」と言った、「私の話を聴いて未来に持ち帰るというのはどうでしょう。ランボーはマルセイユで死んだりなんかしていない、ニューヨークに渡って、少なくとも1918年までは生きていた、と。大騒ぎになりますよ」

ランボーは真顔だった。つられて私も、

「そうですね、ぜひそうしたいです」と言った。

するとランボーは、私の応答に満足したように、葉巻を箱から取り出して火をつけながら、「片足切断の手術を受けたことはたしかです」と、さきほどの話の続きを切り出した。「ほら、ご覧のように、右足は義足です。ところが、それから思わぬ回復ぶりを見せて、医者には奇跡だと言っていました。私としては、もう治療の必要がないなら、一刻も早くフランスを離れたかった」

「ああ、わかります。あなたは母国のフランスが嫌いで、それに、いつも出発してしまう人でしたから」

「ええ。でも今度は、なぜかアフリカ以外のところに行きたくなりました。アメリカのニューヨークあたりはどうだろう、新興の大都市に住んでみるというのは」

「ああ、それもわかります。『イリュミナシオン』には、当時のロンドンに想を得たのでしょけれど、不思議な近未来的都市が描かれています。ニューヨークならそれにもっと近いでしょからね」

「でも、ただ出ていくのも面白くない。そこで、妹のイザベルと結託して、ある芝居をうったのです」「芝居？」

「ええ。フランスを離れる前に、私はイザベルに頼みました。死んだことにしてくれないか、そのほうが伝説になる、と。ついでに、カトリックに改心して死んだということにしてくれてもいい。いや、そうすべきだ。そのほうがさらに神話を作ることができますから。お前の兄さんはカトリック国フランスの偉大なカトリック詩人になる、と妹を説得しました」

私は啞然とした。ランボーをめぐる数ある神話の中でも最大なものの一つ、それは彼が臨終のとき終油の秘蹟を受けてカトリックに改宗したということだが、それゆえ、のちにアンドレ・ブルトンらシュルレアリストたちの非難を受けることにもなるわけだが、なんとそれはイザベルとの共謀によるでっち上げだったというのだ。

「でも、伝記によれば、あなたは遺体になってシャルルヴィルに戻り、そこであなたの葬儀も行われています」

「でっち上げです。母と妹以外、参列者はいなかったのですから」

「でも」と私はなおも追及しようとして、しかし何を訊いても「でっち上げ」にされそうな気がして、それ以上ランボーの死後について質問するのをやめにしてしまった。するとランボーの方から、話題を変えてきた。

「その頃、すでに詩人としての私の名声が上がっていることは知っていました。相棒のヴェルレーヌがずいぶんと喧伝してくれましたから。しかし私は、その名声に乗って詩人に戻ろうなんてことは、

これっばちも考えていませんでした」

「なぜ？」私は思いがけず核心への糸口をつかんだような気がした。「天才詩人なんですから、また詩を書けばいいじゃないですか。さらに名声が上がるし、収入も得られるかもしれない。あるいは、アフリカ時代に書きためた詩を発表するとか」

「まさか。アフリカに渡ってから、私は詩を書いていません。それは伝記の通りです。家族や商取引の相手に宛てて夥しい手紙を書いただけです、そこには若干の紀行文的な、あるいは調査レポート的な文章もありましたが」

「それらはのちにまとめられて、アフリカ書簡とも呼ばれるようになります。その文体を、砂を噛むような、と形容した批評家もいました」

「ひどい形容ですね。でも、砂自体は正しい。砂漠をキャラバンで横断したこともありますが、砂漠というのは、自然も文明も、全てが砂に還元されて、なんとも気持ちのいい場所なのです。同じように、言葉も砂に還元されるなら、それに越したことはありません。余計なニュアンスとか、喚起するイメージとか、勿体ぶった美的価値とか、そういう一切の夾雑物から自由になって、砂のようにさらさらと流れる。私にはそれで十分でした。そしてその分、生が充溢してくるのです。言葉に煩わされることもなく、強烈な光を浴び、深い闇に浸り、また強烈な光を浴びて」

「なるほど。アフリカでのことはわかりました。『地獄の季節』でも、あなたは予言的に『僕はハムの子孫らの真正の王国に入る』と書きました。そのいわば夢なき夢が果たされたということになるのでしょうか。でもそれは沈黙の結果であって、理由ではありませんよね。そもそもなぜ詩を書くことをやめてしまったのですか」

私はついに核心に触れた。あの名高いランボオの沈黙の理由が、ランボオ自身から語られるとなれば、そしてそれを私が1998年の日本に持ち帰って報告すれば、ランボオ生存説以上のインパクトを与えることになるかもしれない。

「それが自分でもよくわからないのです」とランボオは答えた。『『地獄の季節』で私は詩人としての自分を断罪しました。ヴェルレーヌとのあんなスキャンダルがありましたから。それは字面の通りです。しかし、同時進行的に書いていた『イリュミナシオン』だけは完成させ刊行したいと思っていました。それで、翌年ジェルマン・ヌーヴォーと一緒にロンドンに渡ってからも、かなりの数の詩篇を書き足しました。ところが、そこから奇妙なことが起きたのです。つまり、『イリュミナシオン』を書きながら、自分でも最高の詩を書いていると思いつつ、でも同時に、書けば書くほど、詩が自分から離れていくような気もしていました。あるいは、同じことですが、書けば書くほど、沈黙を呼び寄せてしまうような。不思議ですね」

私にはしかし、それほどの不思議とも思えなかった。『イリュミナシオン』を読んできた当の私の感想としても、そのように思われたからである。つまり、最高の詩を読んでいるという悦びがある一方で、何かしら言葉が詩から遠ざかってゆく沈黙の気配のようなものも、その行間には濃厚に漂っていた。たとえていうなら、詩の赤方偏移。天文学において、遠ざかりつつある星の光をスペクトル分析すると赤方に偏移するというが、『イリュミナシオン』もいわば赤方偏移を起こして、結果、詩として異様に美しく謎めいてみえているのではないか。

『『イリュミナシオン』とは』とランボオはつづけた、「詩の亡霊がやってきて、なおも私に詩を書かせたようなものだったのでしょう。もう十分に書かせたと思った瞬間、亡霊は立ち去りました」

こうして、意外にも詩的な理由が述べられたことに、私は拍子抜けした。落胆したと言ってもいいかもしれない。もう少しドラスティックな答え、たとえば「それはたんに詩がいやになってしまった

からですよ」とか、「だって詩を書いても消費するだけで、一文の得にもならないでしょう、ちがいますか」とか、「私が詩を書いていた数年というのは、まあ一種の麻疹みたいなものだったのではないのでしょうか、今ではもう思い出せないくらいです」とか、そういう答えが返ってくるものと予想していたのである。

「名高いあなたの沈黙の理由はわかりました。それ自体すごく詩的ですけどね」と、多少の皮肉も込めて言うと、ランボーも苦笑いしてうなずいた。

「ニューヨークに渡ってからは？」

「えっ？」

「つまりその、沈黙はつづいたのですか」

「なるほど、面白い質問ですね」

ランボーは私の眼を覗き込み、それから壁の方に顔を向けて、何もない壁に話しかけるように言葉を発した。

「あなたはこう考えたいのでしょうか。たしかに、新天地アメリカと言ったって、所詮はヨーロッパの出店みたいなものだから、私を苛立たせ、苦しめる何かがあったに違いない。呪うべきキリスト教文明、呪うべき市民社会。そこで私は、また何か書きたくなった」

「そうです」

「白状しましょう。じっさい、ニューヨークでも私はたちまち退屈してしまい、何か書きたくなりました」

「おお」私は身を乗り出した。名高い沈黙のあとの、ふたたび身内に湧き上がった言葉のざわめきをキャッチしようとしているランボー。

「ただし、詩ではなく小説でしたけど。自伝的な小説です。英語で。詩は母語のフランス語でないと無理ですが、散文なら英語でも書けるような気がしたのです。とりあえず第一作としてアフリカでの苦難を書きました。白人未踏の奥地を探検した話とか、砂漠のキャラバンを組んでアビシニアの王に武器を調達しながら、二束三文で買い取られた話とか。一時期同棲した現地人の女や、息子のように可愛がった使用人の少年のことも。主人公はアーサー・Hとして、もちろん私のことですけど、小説らしく一応三人称の扱いにしました」

「アーサー・Rではなく？」

「ええ。フランス語でHは発音されませんから、ちょうどいいかと。ただ書くことにおいてのみ現れる人物というわけです」

「そういえば、『イルミネーション』にも『H』という詩があって、絵解きめいた難解な作品ですが、最後に『オルタンスを見出せ』とあります。オルタンス Hortense も発音されないHで始まりますよね。でも、そうか、あれは女性存在か」

「いや、鋭い指摘です。私がオルタンスであってもいいのです。オルタンス、オール・デュ・タン hors du temps, つまり時間の外の存在として。性別はたいした問題ではありません」

「で、創作の首尾は？」

「いくつかの出版社に郵送で持ち込みましたが、相手にされませんでした。ランボーは生きていた、ニューヨークに渡って、詩ではなく、小説を書いていた！ そういう触れ込みで出版すれば、売れますよ、とけしかけたのですが」

「そうすると、自分は死んだという自作自演が崩れませんか」

「やむを得ないと思いました。死んでいるのか、生きているのか、二重に混乱させてやろうと。妹に

は迷惑をかけることになりそうです。しかし、幸か不幸か、相手にされませんでした。どうせランボーを騙った出来の悪い贋作だろう、ぐらいに扱われて」

「わかります。フランスでもたびたびそういう贋作騒ぎはありましたから」

「ただ、じっさいにこの片足で出版社に乗り込めば話は違ったかもしれませんが、それも面倒で、そうこうするうちに、話は立ち消えとなってしまいました」

「原稿は？」

「郵送したきりです。返却も要求しませんでした」

「それは残念ですね。後世のためにも、取り戻しておくべきだった」

「そうですか。『アフリカの夜』というタイトルだったのですが」

アフリカの夜？ 似たようなタイトルの著作が、20世紀に入ってから、レーモン・ルーセルかミシェル・レリスによって書かれなかっただろうか。それらと比べても、もしかしたら時代遅れの、異郷趣味が際立っただけの冒険譚に過ぎなかった？ 私たちのあいだに、なんとも言えない気まずい空気が流れた。聞けば聞くほど、期待とは逆の方向に対話は進んでしまう。あの蛮童の、あの傲岸不遜のランボー少年はどこに行ったのだ？

「ニューヨークに渡ってから」とランボーは、少し話題を変えるように言葉を発した。「生活面でも、もちろんいろいろありました。移民申請の手続きとか、アフリカとはまた違った苦難の数々。なにぶんこの足ですから、体を動かすような仕事はできません。商売はもうこりごりでした。というか、私の場合、アフリカという土地、とりわけハラルというイスラムの商業都市と結びついてこそその商売でしたから、このニューヨークで何か始めようという気にはなれませんでした。書く意欲も次第に萎んでいって。結局、通訳とか翻訳とか、その縁でこのミュージアムのオーナー、さっき名前を出したデイヴィッドですが、彼とも知り合いになり、企画などを手伝うようになりました」

なるほど、ランボーの言うデイヴィッドというのは、さきほどのパネル作品のアーティストとは生きた時代がまるで違う別人らしい。

「それでこのランボー遺品展も？」

「そうです。妹に連絡して、私の愛用のトランクとか、アフリカで撮った写真とか、家族に宛てた手紙とかの類を船便で送ってもらいました。自分で自分の遺品展をやるというのも奇妙なものですが、誰も私がランボー本人だなんて思いもしないわけですから、楽といえば楽でした」

「その片足を見ても？」

「ええ。なかにはたしかに、待てよ、ランボーもたしか片足を切断したはずだぞ、と推理を働かせた者もいたかもしれませんが、まさか私が自作自演したとは思ってもよらなかったでしょうから」

「ミュージアムのオーナーは？」

「デイヴィッドにだけは真実を伝えました。最初は半信半疑だったようですが、実際に妹から私の遺品が送られてくると、さすがに納得したようでした」

「しかし、私には分かりました。即座に、あなたがランボーだと」

「それはあなたが未来から来たアジア系の人で、しかも私を研究していた人だからです。さまざまな情報の蓄積から、ある種のカンが働いたのでしょう。ご存知のように、私には、17歳のころ写真家カルジャに撮らせた2枚の肖像写真がありますが、その40数年後のこんな顔、白人社会には掃いて捨てるほどいて、仮にあの肖像写真を見たことがある人でも、まさか同一人物だとは思わないでしょう」

「なるほど、そういうものですか」

「そういうものです」

ここでランボーは一息入れた。私はあらためて遠慮なくその姿を眺めた。ダークグレーのスーツに幅広のネクタイという、きちんとした身なりをしているが、初老というだけでは説明できないような消耗した生の雰囲気、全身から滲み出ている。

「これからもニューヨークでしょうか」

「たぶん。しかし、いまの私はただ生存を繋いでいるだけで、もう生きる意欲が湧いてくることはありません。ニューヨークに渡ってからの私は、つまり抜け殻だったのです。アフリカで全てを吸い取られた、あるいは、ほんとうの私という魂と身体はアフリカに置いてきてしまったということに、いまさらのように気づきました。それはとても小説なんかには回収できないものでした」

ほんとうのニューヨークのランボーが立ちあらわれたのは、実はここからである。彼はつづけた。

「ニューヨークにいても、思い出すのはアフリカのことばかり、あの剥き出しの実存のことばかりなのです。とりわけ、私には閃輝暗点という持病があるのですが」

「閃輝暗点？」

「ええ。つまりときおり、視野の一点に亀裂が入って、そこから、およそ5分から10分ぐらいのあいだ、万華鏡のような光と影のモザイクが広がってゆくのですが、そうなるともういけない、かつてのアフリカの私が呼び戻されて、今の私に取って代わるのです。私はアフリカにいる。あの岩だらけの荒野に立ち、あるいはまばゆい塩湖の縁を辿り、あるいは干からびた蛇の死骸が絡む灌木の茂みの間を歩いてゆく。まるで別の惑星に身を置いているような強烈な光を浴び、その光に逃げ場もなく晒されつづけたあのきびしくも恍惚とした実存…… 詩を書いていた頃の比喩的に膨れ上がった黄金なるものも、きれいさっぱり、私自身の飽くなき金銭への執着に還元されて、余分なところがない…… そのうえにまた、ハラルの市場のざわめきと、朝な夕なコーラン朗唱の響きと、あの鞣革のような皮膚をした人たちに囲まれて…… とりわけ、彼らのダンスの素晴らしさといったら、優美かつダイナミックで、大地のエネルギーが彼らを貫き、突き上げ、中空にはじけるように舞い狂わせるのですが、気がつくとも自分もその陶酔の輪のなかに混じっているではありませんか。私は思わず、『地獄の季節』に予言的に書いた『飢え、渇き、叫び、ダンス、ダンス、ダンス』の世界が実現されていることを感じ取り、ああ、自分はいま、ようやく理想的な生の極限、生の消尽に身を置いているのだと悟りました、そう、こう言ってよければ、生のあとの生のような……」

ランボーは一気に語り終えた。そしてもう、私には何も伝えることはないようだった。私も応答の言葉を失った。同時にふと思った。このようにして、ニューヨークでのランボーの実存は次第にフェイドアウトしていき、それと引き換えに、「1891年マルセイユで死亡」という自作自演のフェイクのほうが真実味を帯びて、皮肉にもやがてただ一つのファクトになっていくのではないか。私は、せつかくこの時間旅行から、しかし何も持ち帰るべきものはないようにさえ思われてきた。その私の失望をそっくり受け止めるかのように、

「結局、生き延びるべきではなかったというのが、私の結論です」とランボーは締めくくった。

私はもう一度窓の外を見た。冬の夕暮れが迫り、低層の赤錆びた倉庫の群れを一段と暗鬱なものに見せていた。そうか、と私ははたと気づいた。ランボーがニューヨークにいる本当の理由。それはほかでもない、この邂逅の話の前置きとして私が述べたところの、ニューヨークの地図が女体を股間のところで縦ふたつ割りにしたその断面図にそっくりだという事実そのもののうちに求められる。ランボーは、まだ詩人だった頃、友人に宛てた手紙の中で、自分の母親のことを、明らかにヴァギナとのアナロジーで「闇の口」と呼んでいなかったか。また別の手紙では、「マザーは僕を情けない穴のな

かに押し込んだものさ」とも。そういう「闇の口」とニューヨークとが相同の関係で結ばれている以上、彼がそこに身を置いて不毛の生を送っているのも、むべなるかなというべきではないだろうか。

そろそろ刻限が来たようだった。ランボーは柱時計を見て、ぐるりと車椅子を回しながら、「きょうは遺品展の最終日なので、これから搬出にかからなければなりません」と言ってドアの方に向かった。

「どうぞどうぞ、私もそろそろ失礼しなければと思っていました」

そう言って私も椅子から立ち上がり、彼の後について部屋を出た。廊下を歩くあいだ、私たちは何も話さなかった。第二展示室の入り口まで来たところで、

「その通路を行けば、あなたの時代に戻れるかもしれません」とランボーは言い、「またいつかお会いしましょう、今度は私が時間旅行をして」と握手を求めてきた。手を差し伸べながら私は、「ええ、ぜひ」と力なく答えた。

執筆者について――

野村喜和夫（のむらきわお） 1951年生まれ。詩人、批評家。小社刊行の主な詩集には、『風の配分』（1999年、高見順賞）、『[よろこべ午後も脳だ](#)』（2016年）、批評には、『オルフェウスの主題』（2008年）、『[パラタクシス詩学](#)』（共著、2021年）、『[シュルレアリスムへの旅](#)』（2022年）などがある。